

## 賀茂葵と楓と桂

梅辻諄

今春、藤木茂さんから賀茂葵（ふたばあおい）の苗を頂戴した。早速わが家の庭の日陰の多い場所に、二箇所に分けて植えた。夏前までには順調に成長し、葉にも艶がでて、小さい紅紫のうつむいた花も咲いた。これを植えてから葵に興味湧いたので、改めて庭のあちこちを探すと、今まで存在しないと思っていたのだが、数箇所の木陰に葵の丸い株が残っていることが分かった。これらは先々代の梅辻年久が植えたものと想像される。そうだとすると、既に70年以上の歳月を経ているわけで、葉も密集した株となり、丸く盛り上がった形も立派である。新しく植えた苗もこのように立派な株に成長してくれることを願って、折にふれて水をやり、周囲の雑草を引いて見守っていた。

賀茂葵（カモアオイ 双葉細辛）は梅辻年久によると、アヒグサ、モロハグサ、フタバグサ、カザシグサ、カタミグサ、ヒカゲグサ、モロカズラの異名がある（京都園芸 第34号 昭和12年）。学名 *Asarum Caules Cens, Maxim* で、ウマノスズクサ科（馬兜鈴科）に属する常緑多年草である。昔から上賀茂の神山附近には自生していたが今では見当たらない。また、かつては貴船附近には群生していたと言うが、丹波地方では普通に生えている草である。世界大百科事典（平凡社）によると、図1のように、「根茎が長く地面を這い、節間が長く、二枚の葉が対生する。葉には長い柄があって、葉身は心臓状腎臓形で幅10cm内外、先端は鋭くとがり、基部は深い心臓形で質がうすく、へりや両面に短い毛が散生する。3-5月には淡紅紫色の楕形の花が葉の間から細い柄をのぼし頂に一個咲く」とある。また、漢方薬の薬効としては、頭痛、発汗、痰を取るので風邪に効くそうである。これを口に入れると口臭を取り、舌の瘡が治る。これらはカモアオイだけでなく、ウマノスズクサ科の草の共通の薬効である。

賀茂注進雑記第二 祭礼には「祭りの日 楓（かつら）山の葵を挿頭（かざ）す。当日早朝に松尾社司等をして挿頭の料をたてまつらしむ。内蔵寮に参候す。祭司すでに來たり、楓葵を置き、詔戸（きのりと）を申す。祭使等かざして出で立つ。」とある。また、「国祭は中の申（さる）の日なり。もとより当祭には葵桂を冠にかけ給ふ。往昔神託の靈現なるお告げありしゆえなり。」とも書かれている。つまり、欽明天皇の昔から、賀茂祭も国祭も聖なる草 葵と同じく聖なる木 楓（かつら）を冠に掛け、あるいは挿頭して祭を行うことが神様のご神託によって行われていることがわかる。そして、この賀茂葵は祭の飾りだけでなく、賀茂氏にとってシンボルと言うべき草である。しかし、葵草はそれ自体日陰の草であり、その花も可憐ではあるがさほど人々の注意を引く花ではない。薬効も風邪の熱さまし程度で、われわれの生活にとってそれほど有益な植物とも思えない。神様のお告げがあったとは云え、この平凡な草をなぜこれほどまでに崇め、珍重してシンボルとしているのか不思議である。

さて、春に植えた苗は順調に育ったが、やがて夏となり学校も夏休みとなって孫どもが喚声をあげながら関東から帰省して來たので、それ以来私の注意は葵から全く離れて、毎

日彼らと熱中して遊び暮らすこととなった。夢のように日々は過ぎ、八月も終わりに近づいて、彼らも遊び疲れて（こちらも疲労困憊して）関東へ引き揚げて行った後に、ふと思いで出して庭の葵を確かめに行ったところ、先に植えた二箇所のうち一箇所はどうやら生き延びていたが、他の一箇所の方は完全に消えうせて枯葉すら残っていなかったのには驚いた。今夏の記録的な猛暑と日照りの連続で、小さな葵草はひとたまりもなかったのであろう。生き延びた方もかなり葉が痛んで弱った感じであった。しかし、70年前に梅辻年久が植えた株の方はこの暑さにもびくともしないので青々と色の良い葉を広げている。

日陰の多い所で育つ多年草であるから、今夏のような酷暑と日照りが連続する苛酷な状況の中では弱いはずだが、密集した株となっている場合には十分に耐えて生存できるようである。その姿に人々は魅力を感じたのだろうか。賀茂氏もこの株のように一族が密集して結束するならば、厳しい社会情勢の中にあっても耐えられることを教訓として、この姿に見たのであろうか。

最近では異常気象に襲われて大旱魃（アフガンなど）が続く一方で、豪雨のための大洪水（ヨーロッパ諸国、中国、韓国など）が世界各地で頻発している。これは急激な温暖化のせいであると言われている。同じような状況がわが国でも奈良時代末期から平安時代前期にかけて起こり、日照りと大洪水に度々悩まされている。（安田喜憲「龍の文明太陽の文明」PHP新書）建設中の長岡京が二度も大洪水で流されたのは早良親王の祟りではなくて、世界的で急激な温暖化にともなう環境激変の一環である。平安時代を通じて異常高温（日本はマリア天国だった）と自然災害が続発したが、この厳しい自然の中でも賀茂葵の株はびくともしない姿を示して、一族はかくあるべしとの賀茂氏の信仰の対象になったのではなかろうか。

次に聖なる木 楓と桂の話に移ろう。賀茂注進雑記第二 祭礼の中で「社頭にて御奉幣あり。葵桂を禰宜持参りて奉れば拝しかざし給ふ」とあり、先に書いた葵楓と葵桂が同じように使われて、「かつら」について二つの文字、楓と桂が区別なく使われている。「山城国風土記逸文」には「月読命が天照大神の勅を受けて豊葦原の中つ国に降り、保食神（うけもちのかみ）のもとにおいでになった。その時一本の湯津桂（聖なる桂）の木があった。そこで月読命はその木によってお立ちなされた。その木のあったところを今も桂の里と名付けている」（「山城国名勝志十」吉野裕訳 平凡社）とある。桂の木はこのようにして神が降臨された聖なる木である。しかし、桂の字はもともと中国ではモクセイの名であって、わが国のカツラにこの字をあてはめるのは誤りである（世界大百科事典 平凡社）。従って湯津桂は本当は「聖なるカツラの木」と云うべきである。

また、わが国では奈良時代から平安時代前期にはカツラを楓の字で書くことがしばしばあった。平安時代の「倭名抄」によれば、桂をメカツラ、楓をオカツラと呼び、男と女で区別する説があるので、楓の古い訓にはカツラがあったことは確かである。しかし、現在では桂と楓ははっきりと区別されている。植物図鑑その他でこの違いを見よう。

〔カツラ〕 学名 *Cercidiphyllum japonicum* Sieb.et Zucc



図 1

賀茂葵 カモアオイ

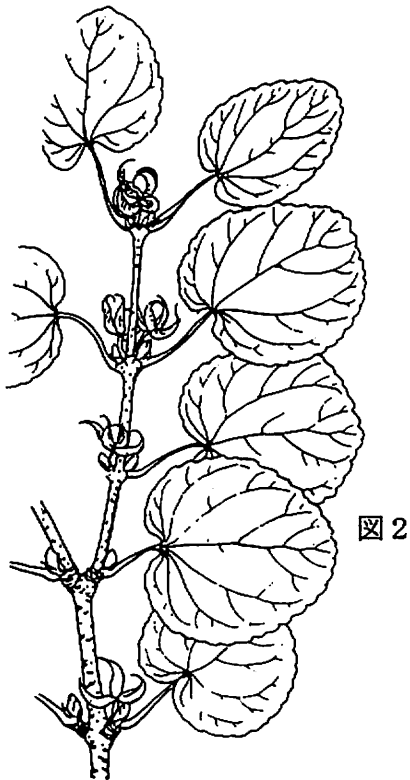


図 2

カツラ

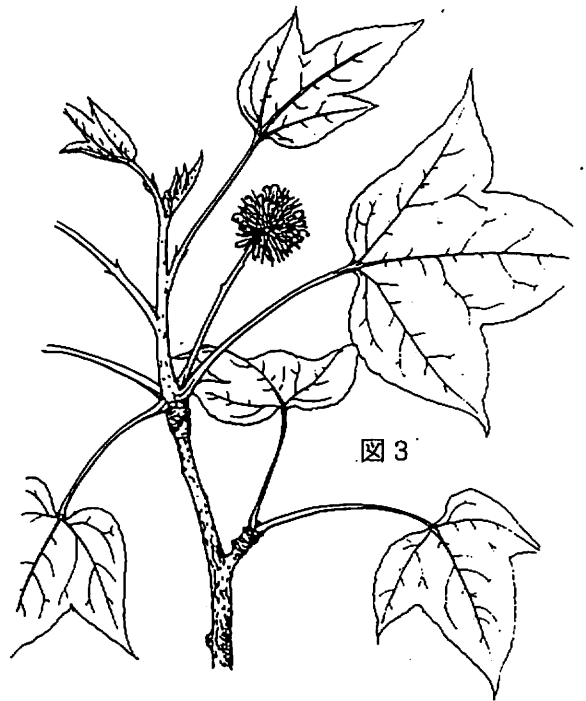


図 3

フウ (楓)

カツラ科の落葉高木で、高さ 25m 以上もなり、短枝が多い。葉は対生し、広卵形で長い柄があり、先は丸く、基部は心臟形。縁には鈍い鋸歯があり、裏面は粉白色を帯びる。花期は5月ごろ。葯は紅色(図2)。カツラに漢字の桂をあてるのは誤りで、桂は中国ではモクセイのことをさす。この混同は平安時代までさかのぼり、「倭名抄」には桂(モクセイ)の和名を女加豆良(めかつら)とする云々。

〔フウ(楓)〕学名 *Liquidambar formosana* Hans

マンサク科の落葉高木で、高さ 20-40m にもなる。樹皮は若木では灰褐色で平滑、老木では細かく割れて樹皮に芳香がある。葉は互生して三中裂して先はとがり、長さ 7-12cm、縁に浅く切れ込む鋸歯がある。(図3) 秋は黄葉または紅葉する。四月には開花する(果実省略)。中国大陸南部および台湾原産で日本には 1727 年(享保 12 年)に渡来した。「山城国風土記逸文」では湯津楓(ゆつかつら)、「万葉集」では若楓(わかかえで)と書かれ、「倭名抄」では楓に平加豆良(おかづら)と書いている。平安時代までは楓の字はカツラ科のカツラの種類を表すと思われてきたが、それ以後は楓はカエデとされて現代にいたっている。樹脂は漢方で解毒、止痛止血あるいは結核の薬として使われる云々。

これらをまとめて考えてみると、次のようになる。楓の木は縄文時代から江戸時代まで日本に存在しなかった。地質時代の第三紀までは日本列島に存在したらしいが、氷河期である第四紀には絶滅し、その後江戸時代中期に中国から渡来するまで存在しなかったので、聖なる木としての名前だけが先に来たのであろう。そして、カツラの木に混用されたと思われる。従って、われわれ賀茂氏の聖なる木はカツラ科のカツラであって、楓(フウ)でもないし桂(もくせい)でもない。

では神聖な木としての楓の名はどこから来たのであろうか。それについて最近、興味ある話を知った。日中合同調査隊による長江中流域にある約 6000 年前の遺跡(湖南省豊県)城頭山遺跡の発掘調査が現在も進行しているが、これまで収集された木材片を分析した結果、その約 70%は楓(フウ)の木であった。つまり、かつて、この都市では建築その他に楓の材木が大量に使われていたことを物語る。楓の木は材質が軟らかいので、当時の貧弱な?道具でも加工しやすかったのであろう。また、芳香を持った材木であり、樹脂は薬用となったので、この都市に住む人々にとってまことに利用価値の高い木であったに違いない。この城頭山遺跡にかつて 6000 年前に住んでいた民族は苗族である。(安田喜憲「龍の文明太陽の文明」PHP 選書) 森の文明の担い手である苗族はその後、約 3000 年前に北方民族の圧力により文明が崩壊したので、南方の貴州省や雲南省に移動して大理を中心とした滇王国を作った。また別の一派は海上にでて日本に到着したのではないかと安田氏は想像する。現在の中国南部の苗族は依然として楓(楓香樹)を聖なる木として崇めており、安田氏が云うように日本に渡来した苗族が名前だけ持ってきたかどうかは分からないが、少なくとも聖なる木としての楓の名だけは古くから日本に伝わっていたのであろう。そして、カツラの木に楓の名をあてはめたと考えられる。